

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00461

研究課題名(和文) アイルランド現代演劇/文学における「告白」の表象研究

研究課題名(英文) A study of the representation of confessions in contemporary Anglo-Irish literature and drama

研究代表者

坂内 太 (SAKAUCHI, FUTOSHI)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：60453990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀後半から21世紀初頭のアイルランド演劇を対象にした告白表象の分析を目的とした。本研究では、体験の率直な吐露として、或いは第三者視点の物語や歴史叙述に仮託した物語として、また、他者の経験の伝聞として、自身の過去の言動を巡る罪悪感や自分が所属する共同体や国家の抑圧された過去の出来事を巡る苦悩を語り、聞き手との相互扶助を通じてトラウマから解放されて精神的な刷新を経験する告白の表象が、当該期間の戯曲に持続的に現れていることを明らかにした。また、こうした精神的な刷新過程の表象が、慣習的に教会や宗教的儀式が担ってきた告白体験の、世俗的な等価物とも言うべき性質を持つことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

抑圧的な植民地からの独立以前に演劇運動の興隆を経たアイルランドの歴史的特殊性を理解するためには、国家・社会基盤に対する文化活動の影響を巡る多様な分析と知見の蓄積が不可欠であり、本研究が行った、過去のトラウマの告白とその共有が個人や共同体の変革の契機を生むという演劇的主題の共時的・通時的分析の意義もその点にある。本研究では、アイルランド演劇/文学における「告白」の表象とその受容の分析を通じて、言語の美的構築物が個人や共同体に救済をもたらすというテーマを持つ持続的訴求力を明らかにすると共に、戯曲の持つフィクションの力が現実に影響を及ぼすという思想が連綿と受け継がれている文脈の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to analyse the representation of confessions in the Anglo-Irish literature and drama of the late 19th and early 21st centuries. The study found that representations of confessions, depicting how characters experience spiritual renewal, when they reveal their traumatic experiences and/or their long-repressed anguishes over past events of their community or their state (in outspoken confessions, or in narratives masquerading as third-person narratives, objective historical narratives, and even as reports of others' experiences) repeatedly appear in the plays of the period in question. The study also found that these representations of the process of spiritual renewal have the character of secular equivalents of the confessional experience traditionally carried out by the churches and the religious rituals in Ireland.

研究分野：アイルランド演劇

キーワード：アイルランド演劇 告白の表象

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究における「告白」とは、カトリック教の公教要理に定められたもの、特にアイルランド人の精神文化に大きな影響を及ぼしてきたメイヌース宗教会議が定める告白、すなわち「心からの遺憾の念と共に、自らの罪を聖職者に申告して許しを得ようとする事」である。本研究の背景にあるのは、前世紀を通じてアイルランド演劇における重要テーマであった教会と国家の扱いが激減し、聖職者も政治家も作中に登場しない傾向が強まったという、文化史上の重要な価値転換の前景化への着目である。カトリック教国としての歴史を思えば、とりわけ現代演劇における聖職者の不在は衝撃的だが、これは、教会内部で若い信者への性的虐待が繰り返された実例や、聖職者達が常習的な強姦グループを形成していた事実などが 20 世紀末に露呈し始めるにつれ、アイルランドの国民の日常生活で、聖職者の権威が失墜した現実の反映と思われた。しかし、その一方で、登場人物が一人ずつ現れて観客に向かって個人的苦悩を物語る特殊な現代演劇作品に優れたものが多く、カトリック教徒の宗教生活で重要な「告白」の様式が、教会権威の失墜とは裏腹に、根強い訴求力を発揮していることも明らかであった。ラジオやテレビで自分の日常生活を気軽に語る、聴取者参加型の番組が人気を維持していることなどを考え合わせると、「告白」と個人的苦悩への理解を求める国民が無数におり、「告白」の宗教的伝統がかたちを変えて存続している、とりわけ、深い苦悩の告白と精神的浄化の可能性が、演劇や文学で探求され続けている可能性は否定できず、20 世紀初頭の演劇や文学の中に、すでにその兆候が見られるように思われた。その予備的リサーチから、演劇や文学が教会の代替物として、20 世紀を通じて静かに「告白」の宗教文化を吸収し続けていたのではないかと、また、20 世紀末からの教会の権威失墜を契機に、その持続的運動が顕著な勢いを得たのではないかという問いが生じた。2018 年 5 月に、アイルランド建築の「客間と文学の関係」について研究するグループとの国際シンポジウム開催と共同討議を得て、戯曲の舞台設定となり、文学でも描かれてきた一定の特殊な場が、告白に必要な様式を補完している、いわば教会における暗く狭い告解室に取って代わる機能を果たしてきたのではないかと仮定するに至った。特に、ある種のアイルランド人劇作家が、「権威ある聖職者によって暗く狭い告解室」で実践されるキリスト教的な告白の文化のエネルギーを、「不特定多数の市民が出入りする暗い巨大な公共空間としての劇場」に向けて解放してきた可能性は高いと思われる。例えば、イエズス会系の教育を受けて聖職への道を期待されて育った作家ジェームズ・ジョイスや、聖職者として教育を受けながら創作に転じた劇作家ブライアン・フリールが、作中で市民の独白と精神的変容を繰り返し扱ったのも、実はこうした持続的な運動の構成者の一人として、教会の代替物を小説や戯曲で生み出し続けていたのだと、改めて評価できるのではないかと思に至った。こうした予備的な検証が本研究での問題設定に繋がった。

2. 研究の目的

本研究では、20 世紀半ば以降、とりわけ近年の教会権威の激しい衰退が指摘される中で、宗教行為としての「告白」をアイルランド現代演劇/文学がどのように吸収してきたのか、また、これらの創作芸術がどの程度「教会の世俗的相当物」としての要素を持っているかを明らかにすることを目的とした。現代アイルランドの戯曲や小説や詩の中で、教会や宗教的な精神生活に言及するものはこれまで無数にあるが、多くの場合、宗教的儀式的パロディを通じた伝統的教会への批判という視点から論じられてきた。しかし、伝統的に教会が担ってきた「告白と精神の浄化」を助長する役割が、教会の機構を離れて文学メディアの世俗的な場に移行していると積極的に評価する発想や研究は、ほとんど無かった。この点で、アイルランド現代演劇/文学に繰り返し現れる「告白」の表象を分析する本研究の意義がある。「告白」の表象を、教会のパロディや批判以外の文脈で検討する視点が、これまでの学術研究で乏しかった原因は、主として聖職者たちによる広範囲かつ長期間の性的虐待の露見が引き起こした教会権威の失墜と社会的衝撃が、アイルランドにおける宗教的文化の遺産を客観的に評価する見方を大きく阻害してきたことによると思われる。また、人権団体やフェミニスト・グループが、教会への批判的対立を深める気運を市民間で醸成してきたため、教会が維持してきた文化資産が国民には今なお重要な役割を果たし、教会以外の場で、その相対物が着実に発展しつつあるという仮説が立てにくかったことによる。しかし、戯曲とその上演や小説などの文学メディアで、個々人の苦悩や罪悪感、フラストレーションやトラウマなどと結び付いた「告白」の描写が頻出する以上、これらの中にアイルランドの国民生活における「教会の世俗的代替物」の広がりを仮定することが必要だと思われる。ここに本研究の目的がある。教会の権威を認めない傾向が強まる一方、カトリック教徒としての精神文化は比較的高水準で維持されていると思われることから、アイルランド国民のそうした精神文化のエネルギーの相当部分が、アイルランド現代演劇/文学で繰り返される「告白」の表象とその受容に向けられていると仮定し、この表象行為と受容の運動に「教会の世俗的代替物」としての性質を探求する本研究の視点には独自性と創造性があると考えられる。こうした視点が、アイルランドの国文学/演劇の学術研究の主流を成す、カトリック教のバックグラウンドを持った研究者たちからは極めて生まれにくい現状からも、本研究には相応の学術的な貢献の可能性があると思われた。

3. 研究の方法

本研究では、カトリック・アイルランドにおける「告白」の精神文化を、現代演劇/文学が、いつ頃からどのように吸収してきたのか、現代演劇/文学における告白の表象がいかなる思想や構造に支えられているのかを明らかにすることとした。また、告白の表象が何を契機として発展し、現時点でどのような広がりを持つのかを明らかにすることとした。本計画は、四年で実施するものであり、研究のマイルストーンを以下の四つの課題を設定した。

課題 今世紀初頭のアイルランド演劇における「告白」の表象分析。

課題 19世紀後半から20世紀後半のアイルランド演劇における「告白」の表象分析。

課題 アイルランド文芸復興と連関した演劇運動の勃興期における「死と復活」の表象と告白表象の連関についての分析。

課題 20世紀初頭の演劇運動の勃興期から現在までのアイルランド演劇における、過去の克服と精神的変容の契機として機能する告白の表象分析。

「告白」を通じた個人的苦悩の吐露や浄罪への希望の表象は、アイルランド文芸復興期のナショナリズムや独立運動と結びつき、アイルランド文化本来の発展を阻害された植民地の苦悩や、国家独立の希望の表象と多層的に関わることが、予備的な研究である程度分かっている。カトリック・アイルランドでは、宗教が国家運営と結びつき、教会と国家が民族国家の形成と発展の両輪となってきたが、国家独立以前のアイルランド文芸復興期に、すでに多様な「告白」の表象を通じて、演劇/文学が「教会の世俗的代替物」として、硬直化した宗教的教義を自由に読み替えて、苦悩やトラウマの克服や自己変革（巨視的には国家独立）の姿や多様な潜在力を、観客や読者に提示していた可能性があるとも思われた。本研究ではここに、現在の「告白」表象の源流の一つがあると考え、当時盛んに劇評や書評が生み出された舞台作品を対象として、この可能性を吟味することとした。本研究においては、告白の表象と様式の歴史的持続性を検証することが重要であるため、文芸復興期の直後の時代、すなわちモダニズム文学への影響をも検討することとした。また、国家独立後の教会権威の動揺を確認しながら、二十世紀後半から二十世紀末の演劇/文学作品に現れた「告白」の担い手と様式の発展を探求することを視野に入れた。1985年までには、保守的な司教の間でさえ、伝統的なカトリックの基盤が揺らいでいるという見方が広がり、1999年の性的虐待によるカトリック教会の内部崩壊を経て、2018年には現教皇がアイルランドを訪れて、国民の教会に対する寛大さと許しを求めるに至り、教会が国民に対して「罪の告白」をする、一種の逆転現象が決定的になったが、この期間の戯曲や小説では、伝統的な教会権威が現れないこと、また、教会や聖職者が描かれる場合には主に批判の対象としてであることばかり議論されてきた。だが、一般市民の生活に次第に構築されてきた告白の様式を吟味すれば、これらの作品を、教会のスクランダルのパロディでも当てこすりでもなく、教会が果たせなくなった役割を普通の一般市民が担おうとする姿勢の先触れとして再評価する余地が大いにあると思われた。最終的には、これらの四つの課題の検討を経て、19世紀後半から現在までのアイルランド演劇における告白表象の文脈を明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

本研究は、19世紀後半から21世紀初頭のアイルランド演劇を対象にした告白表象の分析を目的とした。19世紀後半から20世紀後半の演劇作品については、特にディオン・ブーシコー、W.B. イェイツ、J.M. シング、トマス・キルロイによる戯曲に現れる、死と復活のテーマと結びついた告白表象を検討し、登場人物たちの理性が一時的に武装解除され、社会通念上の体裁や感情の自制から解放されて、率直な告白体験を持つ過程が描かれていることを明らかにした。現代アイルランド演劇においては、とりわけエンダ・ウォルシュやコナー・マクファーソンの戯曲における告白表象を検討し、サミュエル・ベケットやシェイマス・ヒーニー、ジェームズ・ジョイスなどの先行劇作家、詩人、作家が行ってきた社会的弱者への注目と可視化の伝統が継承されつつ、告白する登場人物の精神的変容が模索されている側面を明らかにした。また、前世紀末に社会的には教会権威への否定的傾向が広まり始めた一方で、カトリック教徒としての精神文化は比較的高水準で維持されているアイルランド文化の特殊性と相関して、アイルランド現代演劇、文学で繰り返される「告白」の表象とその受容に、教会の世俗的代替物の現在の状況があることを明らかにした。また、アイルランド文芸復興における演劇運動の勃興から現代までの演劇作品を対象に、告白としての物語行為が過去の克服と精神的変容の契機として機能する諸作品の検討を行った。とりわけ、W.B. イェイツ、サミュエル・ベケット、トム・マーフィー、マーティン・マクドナーなどの書き手による戯曲を対象として、語り手が、時には第三者視点の物語や歴史叙述に仮託した告白として、時には無意識の内に他者の経験の伝聞として、自身の過去の言動を巡る罪悪感や、自分が所属する共同体や国家の抑圧された過去の出来事を巡る苦悩を語り、聞き手との相互扶助を通じて過去のトラウマから解放され、精神的な刷新を経験する過程が描かれていることを確認した。また、個人の精神的な袋小路が共同体や国家の停滞と重ねられ、語り手が物語を通じて過去の経験と対峙して克服するプロセスが、個人と、個人を越えた社会的変革の可能性

を暗示する表象であることを確認した。また、こうした精神的な刷新過程の表象が、慣習的に教会や宗教的儀式が担ってきた告白体験の、世俗的な等価物とも言うべき性質を持つことを示すと共に、「告白」の表象とその受容の分析を通じて、言語の美的構築物が個人や共同体に救済をもたらすというテーマを持つ持続的訴求力があることを確認し、戯曲の持つフィクションの力が現実に影響を及ぼすという思想が連綿と受け継がれている演劇史的文脈の一端を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 FUTOSHI SAKAUCHI	4. 巻 第67輯
2. 論文標題 Death and Resurrection in Modern Anglo-Irish Dramas	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 653-667
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂内太	4. 巻 第66輯
2. 論文標題 Trans-/Trance-forming Everyday Living: A Study of Conor McPherson 's The Weir	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 755-770
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂内太	4. 巻 第65輯
2. 論文標題 Conjuring Complexities: a study on Enda Walsh 's Misterman and bedbound	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 625-638
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------